



ききょうだより

====教育目標：『磨き 輝き 未来をともに拓く』====

山県市立
美山小学校
第12号
令和2年
2月25日

新型コロナウイルス感染予防のため授業参観・PTA総会・学級懇談会を中止しました。苦渋の判断であったことをご理解いただきたいと存じます。今年度も残り1ヶ月となり各学年では、学級目標実現に向けて、さらに進級に必要な力を獲得するため、最後まで努力を重ねる時期です。学力、社会性、人の心の痛みが分かるやさしさ等、地域社会人としての素質を少しでも高めたいものです。

いじめはなぜなくなる？その3

前回は、いじめを受けている側から見た傍観者についての話でした。今回はいじめる側の感覚を考えてみます。

③いじめは、加害者の数と罪悪感が逆比例する

いじめられる子にとっては、いじめは生活の全てです。しかし、いじめる子にとっては生活のごく一部。一日のうち、いじめを意識するのはほんの数分かもしれません。だからもともといじめる側の罪悪感はとても少ないので。さらに、いじめたり、積極的にいじめなくても何となく無視したりする子の数が増えていくと「みんなもやってるから」「私一人じゃないから」と罪悪感はどんどん薄なっていきます。つまり、いじめは加害者が増えれば増えるほど、一人一人の罪悪感は減っていきます。「直接いやがらせとかしてないから、私は関係ないよ」と思う子も少なくありません。しかし、いじめられる子が本当に辛いのはこういう見ている子の多さであることは前回話題にしました。当然ですが、いじめられる子のつらさは、加害者の数に比例します。

保護者の認識も、同じ傾向にあるととらえています。保護者が、子どもから「きょう学校でいじめについて話したよ」と聞いたら、どんな会話をされるでしょうか。以前の勤務校のアンケート結果です。まず、

「あなたがいじめられてるの？」
と心配します。そうでないことが分かると、次は「じゃあ、あなたがいじめてるの？」
これも、そうでないことが分かると
「じゃあ、まあいいけど・・・。」

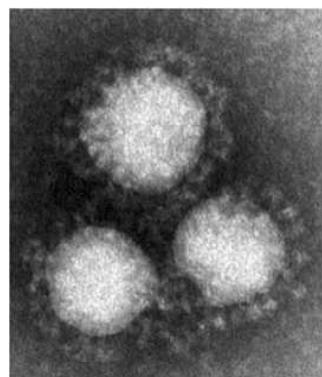
ここで会話が途切れる家庭が圧倒的でした。本来なら、自分の事じゃないから関係ないのでなく、「あなたは見て見ぬふりをしてないでしょ」と、言い切れる大人を目指したいものです。

今美山小の校長室前に「私は人の心を傷つける

言動をスルーしません」と決意した子が自分の名前を書く掲示物があります。少しずつ名前を書いてくれる児童が増えているのが嬉しいです。特に6年生は多くの子が記名してくれています。

新型コロナウイルス感染から

見えてくる人間の差別心



新型コロナウイルス感染の広がりは、本当に心配です。今後学校生活や日常生活に大きな障害にならない事を祈るばかりです。

ウィルス感染の現状を伝えるニュースの一方で、感染者が入院している病院に勤務する看護師やそのお子さんへの差別事象も伝えられています。この事実から、「人間は、他者をふくめ自分とは違う異質な物を疎外する気持ちが、学習の結果としてではなく、ある意味自然に醸成されていく」ことをあらためて認識しています。人種差別、部落差別、性差別など全てそうです。しかし、人類はその歴史の中で「それは間違っている」と共通理解されると、自己の言動を制御します。しかし、心の奥底にはそういう差別心が息をしているのです。あたかも、きれいな水でも水槽の底にたまつた泥がかき混ぜられることで、水槽全体が濁ってしまうようなものと私は思います。いじめや差別が表面上ない社会でも、人の心の底には差別につながる泥があり、それが沈殿しているだけなので、何かのきっかけで心が揺さぶられ、経験していないことが起こった時、これまで「その言動はダメ」と指摘されていない事が起こった時、人は平気で人を傷つける事があり得るという事です。私も死ぬまで自分の心の奥底にある差別心と戦わねばと覚悟しています。(校長 河村 一彦)